

## ② 急な坂スタジオの実験と挑戦

急な坂スタジオ（写真1）

は、横浜市が掲げるクリエイティブシティ構想の一翼を担うべく、創造界隈形成拠点のひとつとして平成18年10月にオープンした創造拠点である。「急な坂」という名が示すとおり、野毛山動物園に向かう急な坂道（野毛坂）の途中に位置している。平成15年に閉鎖した市営の結婚式場「老松会館」の建物をそのまま転用し、演劇やダンスのための稽古場として、また舞台芸術を中心としたアートプラットフォーラムとして、さまざまな活動を展開している。本稿では、立ち上げから現在に至る2年間の理念と実践を振り返るとともに、その活動が横浜の創造都市形成に対しどのような役割を担ってきたのかを検証したい。そして、今後2年間の運営継続が決まった今、これからの展望と課題を明らかにしてみたい。

## 1 設立経緯 市営の結婚式場が舞台芸術の拠点に

最初に、急な坂スタジオの設立経緯を簡単に振り返って

おこう。横浜市は平成18年6

月、歴史的建造物や遊休施設を転用し芸術創造と地域活性化の拠点にしようとする「創造界隈形成事業」の一環として、閉鎖した「老松会館」を舞台芸術の創造拠点として活用するというプランを発表した。運営団体の公募にあたっては、BANKARTの公募時と同様、応募資格が非営利団体に限定され、NPOに運営を委ねたい市側の明確な意思が買われる募集要項となった。公募には4つの団体が手を上げ、書類審査と公開ヒアリングを経て共同事業体「アートネットワーク・ジャパンとSTスポット」が運営団体に選出された。NPO法人アートネットワーク・ジャパンは日本最大規模のアート系NPOであり、国際規模の舞台芸術祭を毎年主催する一方、平成16年からは豊島区にある廃校の校舎を利用し劇場と稽古場機能を備えたアートセンター「にしすがも創造舎」を運営するなど、アート系NPOの先駆的存在だ。（ちなみに筆者は平成14年よりこの団体の職員として勤務している。）一

方、NPO法人STスポット

横浜は、横浜駅西口のオフイスビル地下にある小劇場「STスポット」を運営する団体で、オープンから20年来、地元横浜はもちろん全国の若い才能を発掘・育成してきた実績が高く評価されている。こうして運営団体が選出されてから2ヶ月後の平成18年10月23日、かつての結婚式場は「横浜アートプラットフォーラム 急な坂スタジオ」として生まれ変わり、新たなスタートを切ることとなった。建物の基本的なハードはそのまま、各部屋の床面を改修。50㎡×240㎡の大小5つのスタジオと和室を備えた本格的な稽古場施設の誕生である。（写真2）基本コンセプトは「世界水準の芸術創造を行う、人材・情報・インフラの総合的プラットフォーラム」。オープン記念シンポジウム「横浜、舞台芸術の新展望を探る」では、横浜市の文化政策の責任者や地元のアーティスト、さらに運営団体の代表らがパネラーとして参加し、今後の急な坂スタジオが横浜の創造都市形成に担う役

割について盛んな議論が交わされた。

## 2 運営体制 2つのNPOが合同で新規NPOを設立

運営にあたっては、提案時の計画どおり2つのNPOが合同で、急な坂スタジオの管理・運営を主なミッションとする新規NPOを設立。平成19年5月「NPO法人アートプラットフォーラム」として神奈川県から認可された。理事にはそれぞれのNPOの職員が1名ずつ就任。また現場に常勤する職員4名のうち、3名がアートネットワーク・ジャパンから、1名がSTスポットから出向するという形をとり、人材やノウハウをうまく共有することで全体的なスキルアップを図っている。

経営的には、横浜市からの補助金が平成19年度で2640万円、平成20年度で2730万円、これらは全体予算の5割、6割を占め、そのほとんどが施設管理費・光熱費・人件費・修繕費など、基本的なランニング・コストに計上されている。残りの4

執筆

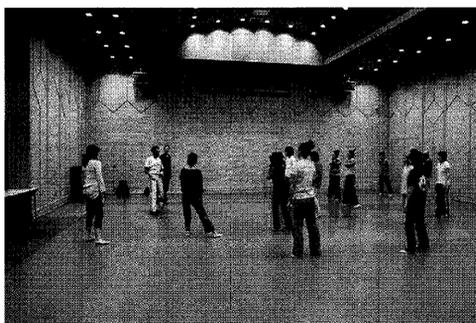
相馬 千秋  
急な坂スタジオ ディレクター

写真2 もと披露宴会場は240㎡の稽古場として利用されている。

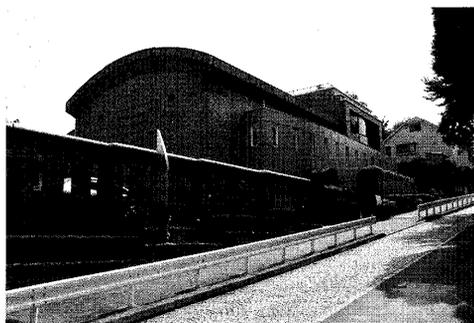


写真1 急な坂スタジオ 外観。かつての結婚式場は、野毛坂の途中に位置する。

割く5割が、事業収入、つまり稽古場利用料収入と外部の助成団体からの助成金によって補われ、自主事業費として支出されている。この自主事業費は、「世界水準の芸術創造を行う、人材・情報・インフラの総合的プラットフォーム」を実現するには決して十分とはいえない額だが、まずは「横浜の、急な坂」というゆるぎないアイデンティティを形成すべく、我々は日々知恵を絞って事業を展開している。以下、急な坂スタジオのこれまでの2年間の活動を、場、人材、プロジェクトの3つの切り口から紹介しよう。

### 3 創造のプラットフォーム「稽古だけじゃない稽古場」

場としての急な坂スタジオを一言で言うならば、それは紛れもなく「稽古場」である。稽古場運営は、急な坂スタジオの第一の機能であり、基軸となる事業である。稽古場、つまりアーティストがそこに集い、作品を創造する場であることが、急な坂のアイデンティティそのものともいえる。オープンから2年弱の現在、5つのスタジオの稼働率はのきなみ80%から100%で推移し、常に高い水準を維

持している。利用者層は幅広く、国際的に著名なカンパニーから地元拠点置く若手劇団までさまざまだが、彼らに共通しているのは、連続した期間、舞台装置を組んでの本格的な稽古ができる場所の確保に苦勞してきたということだ。近年、横浜には赤れんが倉庫やBank Artが誕生、また平成22年には神奈川県の新ホールがオープン予定であるなど魅力的な発表施設が増加しているが、アーティストが日々練習できる稽古場施設は慢性的に不足しているのが現状だ。こうした現実に対し、我々はまず公設の稽古場としていかにニーズに答えていくか、そして単なる稽古場以上の何を利用者に提供できるのかを常に問い、実際の運営に反映させるよう努めている。たとえば、大規模な公演を行うカンパニーに対しては半年前から最大2ヶ月間利用を予約できる長期利用を勧める一方、なるべく利用料を抑えたい若手の劇団には1日からでも利用できるシステムを整えている。

さらに「急な坂アトリエ」と銘打ち、舞台美術や舞台技術のバックアップ機能も拡充した。中庭を改装して舞台装置の制作場所を提供したり、舞台美術・技術に強い人材を紹介・派遣したりすることで、スタジオ利用者がこれまでより一歩上の作品にチャレンジするのを間接的に支援している。また、横浜国立大学建築都市スクール(YIGSA)との協働のもと、学生の設計・施工によってロビー部分のリノベーションを行い、魅力ある空間づくりに取り組んだ。(写真3)「たかが稽古場、されど稽古場」。そこをホームベースとして集う人々と彼らもたらすアイデアが有機的に交錯することで、アートプラットフォームという理念にふさわしいユニークな場が形成されつつある。

### 4 創造都市の担い手たち

創造都市の担い手は、自由な発想で都市に活力を生み出すアーティストであり、それを支える現場のつなぎ手たちである。こうした人材をいかに育成し、実践の場を提供し、ともに新しい価値を創造していくか。クリエイティブシティを遂行する上で最重要ともいえるこの課題に対して、急な坂スタジオが設立当初から展開しているのが、レジデント・アーティスト制度である。岡田利規(チェルフィッ

チュ)、仲田恭子(空間アート協会ひかり)、中野成樹(中野成樹+フランケンズ)矢内原美邦(Miho)の4名をレジデント・アーティストとして迎え、稽古場の無償提供から人的・制作的・資金的なサポートまで、個々のニーズに応じた支援を行っている。すでに世界的にも活躍する彼らの周りには多くの表現者やクリエイターが集いネットワーク化することで、ゆるやかなアーティスト・コミュニティが生まれている。さらにアーティスト・イン・レジデンス事業などによって海外からのアーティストも加わり、世界的な視野でアーティスト同士が刺激しあう環境も生まれている。

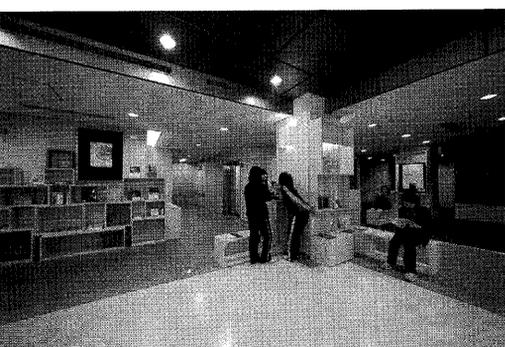


写真3 Y-GSAの学生の手により改修されたロビー © 田中渉

した問題意識の上につくられたスカラシップ制度では、坂の上の稽古場と、坂の下の劇場が連携することで、現時点では2団体に限られている支援対象を徐々に増加させていきながら、横浜に若い才能が集まる仕組みを実験していきたいと考えている。

また、キュレーター(注1)やドラマトウルク(注2)、制作者といった、社会とアートをつなぐ人材の育成も積極的に行っている。「急な坂ゼミナール」と題し、作品づくりの思想性を補強する「思想ゼミ」、企画の立て方・発想の仕方を学び実践する「企画ゼミ」、アーティストの作品制作を支える技術と思想を学ぶ「技術ゼミ」をそれぞれ開講。徹底した少人数制による講義には、第一線で活躍するアーティスト、思想家、プロデューサーなどを講師として招き、大学院レベルの理論と現場の実践を組み合わせた人材育成に力を注いでいる。(写真4)とくに「企画ゼミ」では、横浜という現実の都市空間をフィールドとして実践的な演習が組まれており、ここで育まれたアイデアやネットワークは、自然発生的に次なるプロジェクトの中に受け継がれ、発展を遂げていくくだ

ろう。

今後の課題は、こうして創造都市の担い手となりうる人材に、いかに実践の場としてリアルな雇用機会を創出するか、また横浜に集まってきたアーティストに、いかに次のステップを用意できるか、という難問である。どれだけ有能な人材が育成されようと、そこに生活というリアリティが伴わないならば、彼らは創造都市の担い手として定着することはない。我々はアートのリーディングNPOとして、職業としてのアート、アート経営のあり方について、横浜のモデルを提案していきたいと考えている。

## 5 都市空間に演劇を挿入する

稽古場としてのソフトとハードが拡充し、創造の担い手たちが集まるプラットフォームとして、急な坂スタジオはいよいよ、創造界隈形成という理念をリアルな都市空間の中に三次元のプロジェクトとして具現化していく時期を迎えている。そこで我々が明確に意識している2つの方針がある。一つ目は、我々がスタジオの内部で作る出すものをスタジオの外部の都市空間へと

挿入していく、ということ。

その際重要なのは、単にアーティストの作品を外部で発表する、ということではなく、既存の地域資源と、我々自身もつ人材や発想を大胆に活用し、アーティスト、NPO、行政、そして市民が協働するプロジェクトとして成立させるか、ということだ。二つ目は、こうして都市空間に挿入されたアートという異物が、単なる異物として終わるのではなく、現実社会の中で隔てられたコミュニティや世代を横断し、対話を促す役割を果たしていくということ。その対話の過程では、既にそこにあるもの、ひと、そして出来事に新しい価値が見出されていくはずである。

ひとつの例として、野毛山動物園の園内で上演された中野成樹演出による「Zoo Zoo Scene (ずうずうしい)」(写真5)という作品が挙げることができる。レジデント・アーティストの中野は、実際の動物園でエドワード・オールビーの「動物園物語」を上演したいという発想から出発し、本当に野毛山動物園を借景にしたサイトスペシフィックな演劇公演を実現させた。観劇前には園内を巡るツアーが組まれており、観客たちは

日常から逸脱した動物たちの奇妙な世界へと誘われる。そして劇中の人物たち同様、動物園を訪れた後のシチュエーションに置かれ、そのまま劇は静かにスタートする。普段は劇場の中に閉ざされてしまいがちな演劇が、動物園というリアルな場に立ち現れ、自然や動物、そして人間そのものとの対話を促した特別の時間となった。

もうひとつの例は、現在進行形であるが、吉田町の街頭を会場としたサイトスペシフィック・パフォーマンス「ラ・マレア横浜」である。アルゼンチンの気鋭アーティスト、マリアーノ・ペンソッティが1ヶ月間急な坂スタジオに滞在し、既存の戯曲を横浜ならではの歴史や背景を織り交ぜた新バージョンに書き換え、さらに出演者16名をオーディションで選定する。(写真6)事前下見に訪れたアーティストが公演会場として選んだのは、画廊やバーが立ち並ぶ名店街、吉田町。実際のシヨウウィンドや路上など9つのスポットでそれぞれの場面が同時に展開され、町の通り全体が会場となるため、町の協力がなくして公演は成立しない。我々は共催者であるアーツコミッション・ヨコハ

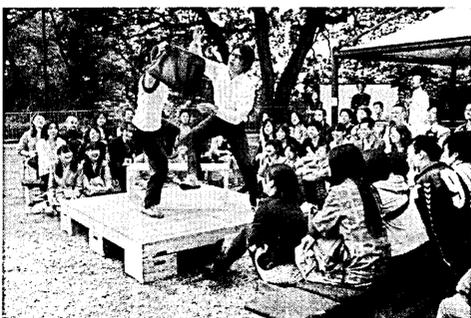


写真5 野毛山動物園内で開催された中野成樹演出「Zoo Zoo Scene (ずうずうしい)」公演 © 飯田研紀



写真4 急な坂ゼミナール第一期「思想ゼミ」。若い作り手たちが集う。

(注1)

博物館・美術館などの、展覧会の企画・構成・運営などをこまかく担当する専門職。また、一般に、管理責任者、もともと欧米の美術館で作品収集や展覧会企画という中核的な仕事に従事する専門職をい、日本の「学芸員」よりも専門性と権限が強い。

(注2)

ドイツの劇場で古くから一般的に普及している専門職で、演劇制作において台本・演出家、俳優との橋渡しの役割を果たし、演劇と社会を有機的かつ創造的につなぐ知的職業。

マとの連携のもと吉田町の町内会と掛け合い、店舗の貸し出しなど協力を要請した。同じ町内とはいえ様々に異なる事情を持つ店舗との交渉は難航したが、街の有力者たちの強い後押しのもと、なんと9つのスポットでの開催が決定し、さらにバーストリートなど地元のイベントともタイアップしながら、現在準備が着々と進められている。

この企画が急な坂スタジオにとってひとつの試金石になることは間違いない。世界最先端の舞台芸術という急な坂スタジオが持つリソースと、横浜ならではの商店街や人町の記憶といった都市のリソース。その両方を現実の都市空間の中で接続させ、アーティストを介して攪拌し、ひとつのリアルなプロジェクトとしてアウトプットすること。その際、アーティストとまち、作品と観客などの間に生じる様々な化学反応は、まさに何を生み出すことになるだろうか？

## 6

### 現場から発想する

#### 「第二の公共」として

これからの急な坂スタジオはどこに向かうのか。それは、これからの創造都市・横浜が

10年後、20年後にどこへ向かうおうとしているのかを、舞台芸術という現場から問うこともある。そしてそれは、横浜から日本の文化政策を見つめ直し、横浜から新しいヴィジョンを探ることもある。

第一に、創造都市の実現という横浜の都市文化政策を担う一アクターとして、現場からの実践を提案し続けることである。創造都市というのはヴィジョンだけでなく、個々のアクションが伴って初めて実現するものだが、その一つ一つのアクションをプロデュースし、世界に向けて発信するのは、我々アーティストのプロフェッショナルの仕事である。そして、これらの先導的な活動が、決して制度化されることなく、常に独立した動きとして、都市文化政策と併走するような状態を作り出したい。自明のことではあるが、アートは行政課題を解決するための手段ではない。それはあくまでもある個人の切実な問題意識から出発した表現であり、アートが紛争を解決するわけでもなければ、直接的に地域を救うわけでもない。そこを履き違え、あたかもアートを地域開発のツールのように、アーティストを地域の問題解決者のように扱うこ

とが起こった瞬間、アートによる創造力は減退し、アーティストの居場所は減少するだろう。急な坂スタジオは、世界中のアーティストが横浜で新たな創造力を発揮するための機会を仕掛け、その産物が都市の現実の中に落とし込まれ、次のアクションへと繋がる流れをつくりだす存在でありたい。

一方で、こうした個々のアクションの集積が

創造都市の実現にも繋がるという理念のもと、行政との真のコラボレーターとして、第二の公共性を担うアートNPOとして、現場と政策をつなぐインターミディアリー（中間支援組織）としての役割を果たしていきたいと考えている。横浜市の主導で定期的な開催される創造都市形成委員会、行政職員ではなく専門家が我々の活動を評価し、具体的な助言や方向性を与えてくれる貴重な機会となつていく。「金は出すけれど、口は出さない。そして評価は専門家に委ねる。」行政側のこうした徹底したスタンスあつてはじめて、自由な発想に基づく大胆な事業展開が可能となる。

# La Marea Yokohama

ラ・マレア 横浜  
オーディション/キャスト募集

応募期限 2008年8月22日(金) 毎日演劇新報

オーディション/キャスト募集は、オーディション/キャスト募集の開催による「キャスト 募集」の開催を前提とします。最終オーディションによる選考、募集の決定、存続の決定は、開催により最終的な決定となります。

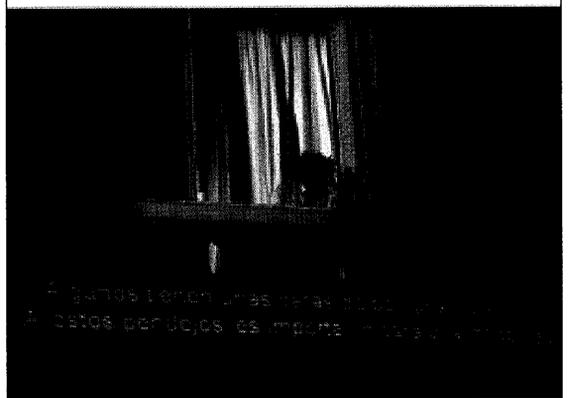


写真6 吉田町で開催される「ラ・マレア横浜」、キャスト募集のチラシイメージ

また、単純に「評価する、される」という一方的な関係ではなく、我々が現場で抱える問題を、今後の施策にも反映してくれらるといった、双方向の信頼関係も築かれてきたことを実感している。

こうした我々NPOと横浜市の関係は、シナリオの共同執筆者の関係に例えることができるかもしれない。行政が書きはじめた「クリエィティブシティの実現」という壮大なシナリオに、どれだけエキサイティングなエピソードや魅力的な登場人物を挿入し、物語の展開をおもしろくすることができるか。どんなに登場人物が暴れようが、エピソードが破滅的な方向に傾

こうが、ともにシナリオの完成を目指して物語を書き続けることができるか。NPOが第二の公共としての存在意義を社会に認められるには、こうした共同執筆者としての責任を果たしながら、常に新しいストーリーを生み出していく発想力と体力を持ち続ける必要があるのではないだろうか。急な坂スタジオは、そんな共同執筆者になるべく、今日も坂の上で次のエピソードを書き続けている。物語はまだ序章だが、その物語はいつか、日本の文化政策という大きなシナリオを書き変えていくかも知れない。